

COMET EVAS? ロベルト・ボツレ

「バレエは僕の情熱です。僕をヴェルチェッリ市のバレエ教室に6歳の時から通わせ、ミラノのスカラ座劇場アカデミーのオーディションを受けさせて合格させたのは母です。そんな母には感謝の気持ちでいっぱいです。良きバレエダンサーになるように「最高のもの」を提供する学校に私を通わせてくれた母には、先見の明がありましたね。でも、ミラノのような大都市で青少年時代を過ごすというのは、トラウマを残すような経験でした。バレエの授業や長時間のレッスンは苦ではありませんでした。でも、レッスンが終わってからが大変でした。夜は食堂で一人で食事をして、下宿していた老婦の家に帰りました。そして、自分の部屋に閉じこもって一人で学校の宿題をする日々でした。僕はまだ子供で、両親や兄弟が恋しかったのです。泣くことがよくありました。重症のホームシックにかかっていました。しかし、あの頃、僕の人生を変えた素晴らしい出会いがありました。1990年のことです。スカラ座劇場のバレエ学校の練習室に居残って練習していたところ、ドアが開いて、何とルドルフ・ヌレエフが入ってきたのです。彼は、チャイコフスキーのバレエ『くるみ割り人形』の振り付けを再アレンジするためにミラノに来ていました。彼は僕を見ると、何ができるかを見せてごらんと言いました。僕は恐怖とまどいでいっぱいでした。僕にとってヌレエフは憧れの存在でした。でも、僕は彼に良い印象を与えたようです。翌年にヴェローナのアレーナで彼が踊ることになった、バレエ『ベニスに死す』の少年タジオ役に僕を抜擢してくれたのです。でも、スカラ座の許可が下りず、僕はヌレエフの隣で踊ることはできませんでした。ルドルフ・ヌレエフとの出会いは、多くの犠牲を払いながら勉強している僕にとっては、自分が正しい道を歩んでいるのだということを確信させ、意識させてくれる機会になりました。僕は当時15歳で、高校とバレエ学校に一生懸命通っていました。何もかも捨てて家族のいる故郷へ帰りたいという気持ちに大きく揺れていました。あの出会いがなかったら、今日の僕はなかったと思います。」

大勢の記者が詰めかけた記者会見でバレエ界での活躍ぶりを淡々と懐かしさをこめて語るのは、ロベルト・ボツレ（38歳）である。2004年以来ミラノのスカラ座劇場の「エトワール」であり、2009年以来アメリカン・バレエ・シアターの「プリンシパル」である彼は、バレエを一般の人々にも浸透させた疑いのない功績を持つアーティストであり、世界中でセックス・シンボルとなっている。

「僕の前の偉大なバレエダンサーは世界中の劇場の観客を熱狂させていました。僕の先生は誰が何と言おうとルドルフ・ヌレエフです。彼は偉大なバレエダンサーであっただけでなく、男役に尊厳と重要性を与えるという、バレエに革命的变化をもたらした振付師でもありました。彼のおかげで、バレエは優雅でデリケートなものから、力強く、たくましいものになったのです。彼は、過去未来の誰よりも、男性のバレエダンサーの価値を見直し、僕たちに贈り物をしてくれたのです。ルドルフはバレエ団の価値も見

直しました。彼の振り付けによる舞台を実現するには、非常に高いレベルを持つバレエ団が必要です。ヌレエフには、ごまかしは通用せず、最高のものが求められます。」とロベルト・ボツレは言う。

ロベルト・ボツレの舞台を見る人は、調和の取れた、彫刻のような身体で素晴らしい動きをえがく、このバレエの天才が持つ身体力と調和に驚かされる。彼の身体はポップだ。スカラ座のスターであるロベルト・ボツレの身体の線が生み出す表現は、世界のメディアに主張力を持つ。クラシック・バレエの神芸的な魅力を満喫させてくれる。

「僕は自分のキャリアをじっくりと形成してきました。高い品質を持つプロジェクトを選びながら、長年にわたって研究、実践、献身を重ねてきた結果生まれたものです。成功はいろいろなものの成果です。才能と努力はもちろん、正しい瞬間にある状況に遭遇する幸運も必要です。ダンスのおかげで、僕は自分の性格を改善できたと思います。僕は練習の時よりも舞台の本番のときの方がうまく踊れるんです。観衆と接触すること、役を演じるという「よいもの」のおかげで、感動を素直に表現し、生きて、伝えることができ、僕の性格である内気さや控えめなところがなくなるのです。自分の中から簡単には引き出せないものを表現させてくれるセラピーのようなもので、いつも進行中です。僕は、嫌だということができないし、批評することも好きではありません。誰かを傷つけるかもしれないし、自分が抜け出したくなるような状況を招いてしまうことも多いのです。」とロベルト・ボツレは言う。

ロベルト・ボツレは控えめだが、彼の評価は断固として不動だ。イタリアのバレエ史上、最も重要なバレエダンサーであり、バリシニコフやヌレエフと比較する批評家もいる。ここ二十年の間、世界の男性バレエは彼の名をなくしては語れないものとなり、彼は意思、美、ファッションのシンボルとして、デザイナーやテレビ、新聞・雑

ロベルト・ボツレとアレッサンドラ・フェツリ。ミラノのスカラ座劇場で



誌でもてはやされている。

1996年、わずか21歳の若さでミラノのスカラ座劇場の「プリモ・バレリーノ」に指名され、2004年からは同劇場の「エトワール」となった。彼はクラシックバレエ、現代バレエの数多くの作品で主役をこなし、世界中の劇場の有名バレエ団と仕事をこなしてきた。2002年には、バッキンガム宮殿において、エリザベス女王在位50周年祭に出演したことが世界中で放送され、2004年のワールドユースデーではローマのサンピエトロ寺院前で教皇ヨハネ・パウロ二世のために踊った。2008年からは、「ガラ・ロベルト・ボツレ・アンド・フレンズ」を率いて、ミラノのドゥオーモ前やナポリのプレシント広場で公演した。彼はまた、イタリア環境財団 F.A.I. と協力して、ローマのコロッセオやアグリジェントの神殿の渓谷のコンコルディア神殿前のスペースでショーを催した。続く2009年から2011年にかけては、フィレンツェのボーボリ庭園、タオルミナの古代劇場、ヴァル・ダオスタのフェニス城、パルマのピロッタ広場、ヴェネチアのサンマルコ広場、トッレ・デル・ラルゴ・ブッチーニの屋外の大劇場、ローマのカラカラ帝浴場で、夏の特別公演ツアーが行われた。

ロベルト・ボツレのショーは、劇場で行われるもの、「自然のロケーション」で行われるものの両方とも、多くの玄人の観衆で迎えらる。「一番熱心な私のファンは日本のファンです。注意深く、バレエをよく知っていて、バレエダンサーをロックの人気スターのように扱ってくれます。愛情をこめて迎えてくれて、プレゼントしてくれたり、サインをもらうために劇場前で待っていてくれます。」とロベルト・ボツレは語る。

彼にとって、バレエとは何か。これからの目標は何だろうか。今もバレエに感動をするのだろうか。後悔していることはあるのだろうか。自分をルドルフ・ヌレエフの後継者と考えているか。替えがバレエシューズを永久的に脱ぐのはいつだろうか。このようなさまざま

まな問いかけに、ロベルト・ボツレは微みながら答えた。「僕にとって、バレエは美、動き、象形、体力、軽快さ、表現です。自分がかけていた目標のすべてに達することができたと思っています。現実には僕の想像や夢見ていたもののすべてをはるかに超えました。僕はラッキーだったと思います。自分の素質を大事にして、勉強するだけでよかったわけですから。残りは自然にやって来たという感じです。これからの予定はぎっしりと詰まっているのですが、今年の主要な予定は上海文化広場で9月27日と28日に行われる「Roberto Bolle and Friends Galà」です。今でも踊っている時は強く感動しています。前よりも怖くなることが少なくなりましたが、はっきりと意識することが多くなりました。多くの舞台に立った今、僕は長年の経験だけからつかむことができる自信を持っています。でも、常に感動があります。僕が感動なくなると観衆にもわかってしまい、バレエを続ける意味がなくなると思います。大きな後悔はありません。ですが、もっと踊りたいと思っているもの、芸術的にもっと追求したいと思っているものは、何といってもモーリス・ベジャールのボレロです。彼は天才的な振付師で、僕は非常に好きです。現代バレエの成長と進化を体現した人だと思います。ルドルフ・ヌレエフがそうであったようにね。でも、モーリス・ベジャールやルドルフ・ヌレエフを除いたら天才的な現代の振付師が存在しないと言っているわけではありません。でも、彼らの偉大なところは、クラシックなものを現代的にしたことで、現代のバレエにはないと思います。僕をヌレエフの後継者と考えている人には、彼は僕の憧れの存在だと言いたいです。ルドルフは巨大な壁を打ち破りました。それに比べて僕は、喩えで言えば、一つのドアをかくかに開けたに過ぎないのです。僕は38歳ですが、いつバレエをやめるかはまだ決めていません。でも、僕には自分には厳しいので、自分が美とハーモニーを観衆に提供することができなくなる前に、バレエをやめることができると思います。もちろん、舞台を去るということは非常に辛いことです。でも、無様な姿は見えたくありません。バレエダンサーというのは、前向きの感動を伝えなければいけないと考えています。『以前はあんなに美しく、上手だったのにね』と言われるようになったらだめですね。』

GianAngelo Pistoia
ジャンアンジェロ・ピストイア
© Concept & design:
GianAngelo Pistoia/A.P.
© Photos: Silvia Lelli/
Teatro Alla Scala/A.P.
- Rosalie O'Connor/
American Ballet Theatre/A.P.



ロベルト・ボツレとヴェロニカ・パート。ニューヨークのアメリカン・バレエ・シアターで。